

図書館通信 —66—

1983. 12

図書館 雑考

武居良明

《行政の文化化》というカラスの鳴き声のようなことばがある。経済成長にあやかろうとすることしきりだった自治体が、これではいかん、とばかり反省のうえに立ってはじめてのことだ。橋の欄干の彫刻にはじまり、郷土出身文士の記念館のたぐいにいたるまで、それぞれの自治体が思い思いの趣向をこらして《文化化》を競い合っている。ところがその《文化化》も、立派な図書館を一つ、ということになると、どうやらうまくないようである。いく人かの自治体の首長さんたちから聞いたことだが、その理由というのは、そんなものを作っても票にならん、ということのようだ。ことほどさように、図書館というものは、がわ国では住民受けのしない施設なのである。

では、いずこへいっても事情は同じなのか、といえば決してそうではない。たとえば、イギリスを例にとろう。この国では、どんな小さな町へいっても必ず図書館が、少なくとも一つはあるのは当たり前だとしても、それが実によく利用されているのだ。当然のことながら、まずは、その町の住民が老若を問わず利用する。昼過ぎになると買物かごをさげた主婦がやってくる。夕方になると労務者風の男もやってくる、という具合である。20年前、はじめてイギリスへいった時分に比べると、最近では、テレビ普及の影響もあって利用者数が少なくなっているのは確かだが、それでも、とてもわが国の公立図書館とは比べものにならぬ高い利用率である。

いま一つの利用者群は、筆者自身をも含めた研究者たちである。村レベルは別として、町レベルから上になると、その地域にかんすることならば、自然であれ歴史であれ、まずはその地域の図書館へ足を運ばなければ仕事にならない、といえるくらいに実によく資料が集められている。朝か

らの利用者たちというのは、主としてこうした人びとである。

ともあれイギリスの公立図書館は、小さければ小さいなりに、文献収集といい、内部の設備といい、感心するほどよくいきとどいているのだ。そして、利用者ばかりでなく、町ゆく人びとも、おらが町の図書館を、心から誇りにしているように見受けられるのである。路上で図書館への道を探ねた折など、道を教えた後に、「この町の図書館の特徴はねえ、……」とわがことのように自慢ばなしをはじめのおばさんなど、珍らしくもなかった。要するにイギリスでは、図書館の利用ということが、市民生活の一部としてきわめて自然に考えられている、という印象を受けたものだった。

それにひきかえ、わが国の場合はどうだろう。公立図書館といえば、試験期の生徒たちが勉強部屋がわりに利用するところ、というのが本音だろう。だが、一方では本の値段もあがるようだし、やがてわが国でも、かつての銭湯のように図書館が親しまれるようになるのではなからうか、と思われはじめた矢先、テレビ時代に突入し、マンガとコピーの洪水に流されてしまった。こうした傾向は、利用者にとって不幸なばかりではなく、図書館人にとっても不幸なことに相違ない。司書が、イギリスでの場合のように、自治体職員の中でれっきとした地位を確立し、市民大衆からも期待

(次ページにつづく)

もくじ

図書館雑考	1
〈私のすすめたい本〉	
ヴァレリー「テスト氏」	2
人間と機械の共生	4
お知らせ	3

と尊敬を集めうるようになる以前にコンピューターとの協業を強いられ、複写機のオペレーターとなることを余儀なくされていくのである。

ひるがえって、大学図書館を考えてみよう。これまで述べてきた公立図書館にたいする彼我市民の親近度の違いは、当然のことながら、彼我の大学図書館のあり方をも大きく規定せずにはおかないのである。紙幅の制約もあることゆえ、ここでは、二つの点に問題を限って考えてみよう。

第一に、そもそも図書館それ自体をめぐる、教師の間であれ学生の間であれ、共通の認識が、いまだできあがっていないということだ。筆者の前任大学での経験では、図書館とは不用になった古書を受納する倉庫ぐらいにしか考えていない教師が多く、腹立たしさを通り越して苦笑させられる場合がしばしばだった。この非常識さを裏付けるものが、図書館維持費の出ししぶりである。最小の費用で最大のサービスを、という各学部の「エコノミック・アニマル」ぶりには、筆者もほとんど閉口した。また、文字どおり目と鼻の先に図書館があるのに、やれ分館をつくれの、やれ分室がないと不便だ、と運営委員会のたびごとにごねだす委員がいたが、かれらなどは、研究とは回転椅子をクルリと廻して手の届くところに本がなければできぬもの、と思ひこんでいるのではなかろうか。「来週からしばらく図書館で仕事をする」、という具合に図書館を利用するイギリスの大学教師とは、かなり違うようだ。このように教師が図書館を利用すれば、勢い司書にたいしても刺激するところ大きく、かれらの専門の角度から、一定の守備範囲というものを持たざるをえなくなる。なぜ

〈私のすすめたい本・48〉

ヴァレリー『テスト氏』

三 浦 信 孝

外国文学を専攻する人間にしては、私はあまり本を読まない部類だろう。よほど自分の関心を惹くものでない限り、まず本を手にしなない。学生の頃からそうだった。受験勉強の延長で、講義で指定された教科書・参考書を次々と征服する友人や、岩波文庫を一日一冊読破する文学青年、スリラーやSFが何よりの娯楽という同級生もいたが、私には読書を知識の宝庫とみなす教養主義も、読書から無上の快楽を引き出すだけの精神的余裕も欠けていた。いかなる書物よりも自分の抱える個人的問題のほうが大きく、それゆえ一冊の本に始め

なら、尋ねられても答えられぬ、というのは、その道の専門人として不名誉なことだからだ。

いま一つの問題点は、図書館業務の電算化にかかわる事柄である。とにもかくにも、図書館業務の電算化ということは世界の趨勢であり、避けては通れまい。だが皮肉にも、この機におよんで、市民の図書館との親近度の差異が、ふたたび大きくクローズ・アップされてくるように思われる。情報過多の現代社会で、すべての図書館が悉く出版物を購入し、しかもそれらを保存するとしたら、このうえなく不経済なはなしだろう。保存庫の増設につぐ増設を、各図書館がくり返さねばなるまい。そこで都市圏では、圏内の全館をオン・ライン化し、緊密な相互協力を前提に、各館がその使命にマッチした収書と保存をおこない、重複を必要最小限に止めては、との発想が生まれよう。現にイギリスでは、そうしたオン・ライン化が、一昨年時点でかなり進められていた。地域における大学の使命、といった観点からいっても、望ましい傾向なのだろう。

だがその場合、官僚制の壁はさておき、連携しようとする図書館同志で、量質共に大きな落差があったのではオン・ライン化は困難だろう。大学図書館がそれを目指したとしても、わが国の多くの都市では、貧弱な公立図書館との落差が大きく、仮に設置しても、しょせん電算機の役不足という事態がつづくのではなかろうか。要するに、育つべきものが、育つべき時に育てられなかった、ということの報いは、容易につぐないえないようである。

(人文学部・経済史・産業史)

から終わりまで付き合い通すことができない。一冊の本を手にし、まだ何頁も読み進まないうちに、ある一句が、わずか二、三行の言葉が、今から思えば理不尽なまでの激しさで心を捕えてしまい、呪縛されたまま身動きがとれなくなってしまうのだった。

例えば、ポール・ニザンの小説ならその冒頭の一句、「その時頃は二十だった。だが、それが人生でいちばん美しい年齢だなどは、誰にも言わせない」、マルクスの哲学者なら、引用は不正確だが、「人間は受苦する (leiden) 存在である。だが、受苦するが故にこそ、生への情熱 (leidenschaft) を燃やす存在なのだ」といった言葉が、前後のコンテクストを離れて脳裏にこびりつき、それは次第に増幅されるリフレインのように、私の中の何かに共鳴して鳴り響き、もう先が読めなくなってしまうのである。

いまここに引いたのは、いかにも青春の感傷をさそうロマンティックな響きの台詞だが、二十になるやならずの私の上に圧倒的な真実として覆いかぶさっていた言葉は、パスカル『パンセ』中の一句、「人間のすべての不幸は、ただ一つ、人間が自分の部屋にじっと一人で留まっていられないことに由来する」というものだった。もし人間が一人っきりで自分の部屋に閉じ込められ、外へ出て人と会うことなしに、孤独の中で自分と向かい合うとしたら、たちまち彼は自分の存在を支える根拠を失ってしまうだろう。いくらデカルトのように、「我思う、故に我在り」と叫んでみても虚しい。私の存在をいくら私の意識が保障しても、それが私の個意識である限り、どこにも客観的な拠り所はない。当時、私はよく、自分が蟻地獄のすべり落ちる砂に足を取られ、声も出せぬまま、ずるずる穴の中に引きずりこまれる夢を見た。

孤独の部屋の中で自分の存在の空虚をかいま見、不安に怯えた人間は、いきおい外へ飛び出し、仕事でも賭事でも恋愛でも競技でもいい、束の間せよ熱中できる運動に身を投げ出す。しかし、激しい運動への没頭だけでは、存在の空虚を忘れ去るに十分ではない。彼は、独楽のように、くるくる高速で回っているから立っていられるので、回るのを止めた途端に倒れてしまうからだ。本来的に空虚をかかえてしまっている私の存在を、もっと確かな形で私に保障してくれるもの、それは他者である。私はこれこれの人間として確かに存在する、と自分で自分に言いきかせても益のないのに対し、他人があなたを敬意や羨望、驚きや憧憬のまなざしで見つめるとき、あなたは自分が他者の視線の対象として存在するのを実感する。あなたは他者の鏡に映った自分の像を享有するのである。ここから、孤独の部屋では生きられぬ人間の、他者を前にしたさまざまなパントマイムが、見られるための演技が始まる。

こうした人間の悲喜劇の認識を、私にもっとも整合的な理論として与えてくれたのは、やはりサルトルの『存在と無』だったが、それを一つの強烈な文学的造形として示してくれたのは、サルトルに一世代先立つ同じフランスの作家ポール・ヴァレリーの『テスト氏』であった。

ヴァレリーはアカデミー・フランセーズの会員でコレージュ・ド・フランスの教授、1945年の死に際しては国葬をもって遇されたほどの大作家であるが、彼が作家生活に踏み切ったのは50近くになってのことであり、それまでは、初期に発表した何篇かの詩と散文を除けば、「読まれるために書く」という一切の意図を放棄して、ただ自分のた

めにだけ、自分の知的習練として、毎日早朝の数時間を書くことであっていったという、作家としては変わった経歴の持ち主である。そして、その刊行を予定せずに表きためた個人的ノートは261冊、3万頁近くにのぼり、それは、注文に応じて書き活字にした「作品」群を圧倒的に上まわる。

*『テスト氏』は、ヴァレリーの処女作ともいべき「テスト氏との一夜」に、中後期になって序文と幾つかの続篇をつけ加えて成り立っている本であるが、その「一夜」は、優れた人間、権威ある人間と呼ばれる人間は、自分の独自性と価値を他者に承認してもらおうべく精力を濫費する弱い精神にすぎず、最も強靱な頭脳とは、「無名の、おのれを告白することなく死んでゆく人である」として、テスト氏が一人で住むがらんとした部屋をこう記述する。「ある任意の、という印象を、私はこれほど強く受けたことがない。それは定理上の一点に似た、ある任意の住居なのだ。この部屋の主人は、もっとも一般的な内部に住んでいる。私は彼がこの脇掛椅子で過ごす時間について考えてみた。この純粹かつ凡庸な場所にふさわしい無限の悲しみを思い、私は恐怖を感じた。私もこういう部屋に生活したことはある。そして私は、こういう部屋が、自分にとって最終的なものだと思うことはできなかつた。恐怖の念なしには。」

晩年を文学的栄光につつまれつつ奇妙な孤独のうちに過ごしたヴァレリーが、その文学復帰という事実によって、最後までテスト氏の部屋に留まりつづけたと言えるのか否かはここで触れないとして、彼の造形したテスト氏が、人間精神の一つの極限として、自意識という余剰をもてあます青春を誘惑しつづけてきたことだけは確かである。

(教養部・フランス語)

(*印は本館所蔵を示す)

お知らせ (本館)

◎冬季休業中の長期貸出

貸出冊数：5冊以内

貸出開始：12月1日(木)から

返却期限：昭和59年1月17日(火)まで

◎休館 (臨時も含む)

昭和58年12月19日(月)～昭和59年1月4日(木)

◎開館時間の変更

昭和59年1月5日(木)～1月10日(火)

月～金：午前8時30分～午後5時

土：午前8時30分～12時

〈私のすすめたい本・48〉

人間と機械の共生

多々良陽一

今年の秋休みの出来事から書く。10月4日午後、日本平パークウェイで、静岡大学工学部精密工学科4年のN君がオートバイで下り坂をドライブ中、左カーブの手前で左折しかけた時に転倒落車しオートバイごと路上を滑走しセンターラインを超え、たまたま登はん中の対向車の左前部に激突し死亡するという事故があった。新聞に報道されたので記憶している人も少なくないと思うが、N君は私の卒研生であったので、殊のほか忘れられない事件であった。成績も良く、積極性のある学生で、トヨタ自動車に就職が内定していた。機械いじりの器用な、特に車の好きな学生であった。8月の大半は卒研に追われ、9月の前期試験が終了し、やっと一息ついて静岡の自宅に帰省中での事故であった。

何故こんな事になったのか。私は静岡南署やオートバイ販売店を訪ねてみた。彼らは、最近の学生（特に静岡大学の学生）は休日になると堰を切ったように街に駆り出し、車やオートバイを荒っぽく乗りまわし、事故が絶えず、市民に多大な迷惑をかけているという。若い者は大人のいう事を全然聞こうとしないともいった。今や、静大生は静岡市や浜松市の誇りどころか、暴走族と同レベルにみられているのがわかった。

N君をはねた車は遠出の家族ドライブを楽しむ僧侶の運転であった。その瞬間において前方不注意の可能性もあった。事故回避の処置をとらなかつた事も事実である。路上を斜めに滑落する物体をよける意志があれば、ハンドルを少し右に切りさえすれば衝突を回避できたはずである。車のドライバーにはその程度の集中力と事故回避の義務が要求されていていいはずである。車を運転する人間は弱者を助けるために常に極限状態の準備をしておかねばならない。

この事故の第一原因は、なんといってもN君の運転未熟による転倒であった。彼の運転技術ではそのカーブを曲がるのにスピードを出しすぎていた。人間がオートバイに乗る時、人間と機械のシステムが構成され、人間と機械のつき合いが始まる。機械（人工のもの全て）は本来、人間のた

めになる事を人間に代わって黙々と従順にやってくれる、いわば下僕である。しかしながら、この奴隷はある点では人間以上の性能を持っていて、その性能は年々すさまじく向上する。転倒しにくいオートバイを開発中だったヤマハは販売合戦でおくれをとった。若者は安全性よりスピード性能を好んだ。一方、人間の性能が機械の性能と匹敵して進歩していくわけではなく、山野を駆けまわった原始時代よりむしろ体力的に劣るであろう。N君の愛車のホンダ240ccは毎時180kmのスピードが出る。空気を切り新幹線並みのスピードでオートバイを飛ばす。これは人間の能力をはるかに超えた状態であって、オートバイを制御できるなんてものではない。人もまた物体でしかない。人車一体感に酔うのは暴走族かレーサーのする事で、日頃勉学に励むインテリのする事ではない。一方、オートバイという機械は運転者の指示通りのスピードを出す馬車馬でしかない。運転者の運転技術や身体状況、道路状況にあわせて、運転者に語りかけることは絶対がない。自ら速度を調節するような芸当は、今の機械ではとても無理である。そこまで進歩していない。人間から機械への働きかけだけあって、逆はない。だから、機械の性能だけを追求するのは人間の破滅につながる。人間の性能に合致した安全性の高い機械こそ追求すべきである。「人間工学」という学問は、このような人間と機械の関係を問題とする分野であって、私の授業でも話しているのであるが、学生は授業を単位修得と割り切り、実生活に結びつけないから困る。

「人間工学」に関する入門書として、つぎの2冊がたまたま手元にあり授業のネタにもしているので紹介する。1) 大島正光ほか著、*「生命と機械」(生命科学8)、共立出版(昭42)。

2) 加藤一郎編著、*「工学の人間学」—人間と機械の共生—(テレビ大学講座) 旺文社(1980)。

現代は人間と機械の共同生活(共生)の時代である。重要なことは、人間が機械に順応してはいけぬ事であって、人間に順応すべく機械をしむけるべきである。人間が誤ちを犯すとき、機械が修正してくれる。そんな機械が本当は必要であろう。現在の機械を過大評価してはいけぬ。機械が好きで機械に殺されたN君の悲劇を繰り返してはいけぬ。

(工学部・精密工学)

(*印は本館所蔵を示す。)

(*印は分館所蔵を示す。)